

# 解題—桜田勝徳調査研究資料アーカイブ—

中野 泰

## 1. 桜田勝徳調査研究資料の目録化の経緯

### 1) 民俗学者桜田勝徳

桜田勝徳（1903-1977）は、漁村や漁業民俗の研究で知られる民俗学者である。慶応義塾大学文学部史学科で学んだ後、柳田国男の『明治大正史世相編』の編纂を手伝い、民俗学の研究を展開していった。その歩みは、アチック・ミュージアムとの関わりが多く、社会経済史料を多用するなど、柳田民俗学と異なる性格を有していた。戦前には農林省の嘱託となり、全国の漁村や漁業調査に従事し、戦後のGHQ占領期にはCIE部局のアドバイザーをつとめた。戦後、漁業制度改革史料の収集に携わり、農林省水産庁水産資料館館長をつとめ、晩年に白梅学園短期大学の教授をつとめた。漁業民俗を専門とする研究者として知られたが、戦後は、村の捉え方や方法論に対して再考を促したことでとも良く知られている。

### 2) 没後の経緯—著作集刊行・調査研究資料の寄贈—

桜田勝徳没後、1980年より名著出版から『桜田勝徳著作集』の刊行が始まり、1982年に全巻7冊で完結した。5年目の1982年の7月、家族により桜田の調査研究資料が慶應義塾に寄贈された。桜田と旧知の仲であった民俗学者・関敬吾と漁業史家・小川博による仲介のもと、当時慶應義塾に勤務していた伊藤清司と川崎史人が受領の任にあたり、文学部民族学考古学研究室が本資料を保管・管理することとなった。移管直後から整理作業に着手した川崎と伊藤は、その成果を三田史学会編集の『史学』53巻2・3号および54巻1号にまとめ、簡単な目録と内容を紹介した〔川崎 1983；1984〕。この整理の跡は、現在のアーカイブにも、多数のメモ書きが残されていることから確認できる。資料は段ボール箱（箱数10個）に納められた状態で、慶應義塾の西校舎倉庫に保管された<sup>1)</sup>。2012年3月には、「適切な保管・管理と今後の活用促進」を意図して、調査研究資料は民族学考古学研究室から、慶應義塾大学文学部古文書室へ移管された。



写真1 保管状況（慶大西校舎）



写真2 ダンボールに収納されていた資料外観

### 3) 目録化

本調査資料の目録化作業は、以下の2つの段階を経て開始された。一つは、中野が桜田勝徳調査研究資料の所蔵確認と閲覧を申し出たことに始まる<sup>2)</sup>。慶應義塾大学社会学部の鈴木正崇教授を通じ、民族学考古学研究室は資料の現状を確認し、外部からの閲覧依頼に対応できる体制を構築する再整理作業を、中野とともに、慶應義塾大学文学部の山口徹教授、下田健太郎、小林竜太、栗山知之（以上、文学研究科 後期博士課程）、宇田川飛鳥（社会学研究科 後期博士課程）の協力を得て行った（2010年6月-2011年1月）。二つ目は、この作業を母体に継続、発展させた科学研究費補助金に基づく目録化作業である。この作業は、中野を中心とし、渡瀬綾乃、小森明里、桜井知得、辻本侑生、古屋知宏、森戸日咲子（以上、人文・文化学群 人文学類）、桜木真理子（筑波大学人文社会科学研究科博士課程）の協力を得て進めた（所属名は作業当時の名称である）。また、資料の読み取り作業には、林圭史（筑波大学人文社会科学研究科博士課程修了（歴史・人類学専攻））の協力を得た。一つ目の作業では粗目録化の作業を行った。作業の過程で、保存環境の改善等のため調査資料を、それが納められていた段ボール箱から天箱へ、資料のまとまり毎にユニパックへ封入し、プラスチック製コンテナ（以下、「テンバコ」）へ移し替えた。二つ目の作業においては仮総目録と形態別仮目録の作成作業を行った。作業に先んじて、資料の撮影を行い、閲覧の便宜を図った。並行して、桜田勝徳の長男武徳氏へ、調査研究資料の所蔵状況を中心に、インタビュー調査を実施した<sup>3)</sup>。



写真3 ユニパック・プラスチック製コンテナへの移し替え



写真4 資料の撮影

## 2. アーカイブの内容

本アーカイブの編冊の形態は、ノート、バインダー、風呂敷、封筒、その他に分類できる。編冊別の情報と箱別収納状況を予め整理すると表1の通りとなる。1箱はバインダーが最も多く、2箱はバインダーと封筒、3箱は風呂敷が最も多く、4～6箱はノートが最も多い。7箱はバインダーとともに雑が、8箱はノート、9箱は風呂敷、10箱は主として封筒と雑で構成されている。

その他については、印刷物（抜き刷り、複写論文、学会誌、新聞、地図）、写真、書簡、木箱等である。

表1 形態別資料の箱別収納状況

箱No.	ノート (件数)	バインダー (件数)	風呂敷 (件数)	封筒 (件数)	雑 (件数)
1	4	8		1	
2		3		2	2
3			5	2	

箱No.	ノート（件数）	バインダー（件数）	風呂敷（件数）	封筒（件数）	雑（件数）
4	54	2		5	14
5	25	9		8	
6	20	8		7	2
7		4	1		4
8	15	2		2	
9			3	3	
10				8	2

## 1) 形態別仮目録ノート

ノートの内訳は、いわゆる大学ノート等を用いたものの外、和綴じノートがある。ノートについては、形態別仮目録に、118 件、計 160 冊ある。本アーカイブで最も中心的な資料形態である。この内訳は、1 箱 4 件 5 冊、4 箱 54 件 72 冊、5 箱 25 件 26 冊、6 箱 20 件 35 冊、8 箱 15 件 22 冊である。ここでは、これら 118 件のノートについて、内容分類を行った(表 A)。分類枠は、フィールドノート、資料ノート、学務ノート、自伝ノートである。フィールドノートとは、民俗調査等のフィールドワークに基づくもので、調査日、被調査者等の情報とともに、フィールドの情報が記されたものである。資料ノートとは、ある種のテーマに関して収集した諸資料を記録、整理したものである。学務ノートとは、大学等の教育機関における講義、会議等に関連する資料である。自伝ノートとは、自らの生い立ち、家族等の思い出に関する資料である。数量から見ると、フィールドノート 61 冊、資料ノート 88 冊、学務ノート 12 冊、自伝ノート 2 件 7 冊である（重複を含む）。フィールドノートの内訳は、4 箱 9 冊、5 箱 12 冊、6 箱 24 冊、8 箱 16 冊である。多くのフィールドノートが 6 箱と 8 箱に集中しており、8 箱には、いわゆる大福帳が集中している。

なお、形態別仮目録ノート以外にも、形態別仮目録風呂敷内に宝島関係フィールドノート（9-6-7～23）がある。フィールドノートや学務ノートには年月日の記載があるものも少なくないため、可能な限り目録へ反映させている。

表 A ノートの分類

箱No.	資料No.	表題	作成年代	分類
1	1	漁業々態別漁村社会観察資料 I		資料ノート
1	2-1	漁獲物配分資料 I		資料ノート
1	2-2	漁獲物配分資料 II		資料ノート
1	3	漁村労働ノート		資料ノート
1	7	漁獲物配分・漁業収益分配慣行 漁業形態別分類ノート I		資料ノート
4	1	阿波藩漁村棟付帳 灘村棟付 牟岐東浦棟付 牟岐西浦棟付		資料ノート
4	2	ソーシャルテンション 漁村調査 1953-1954	1953年-1954年	フィールドノート
4	3	民間伝承総論		学務ノートカ
4	4	佐渡両津村、金泉村 漁村経済調査 昭和八年度 出雲崎漁村経済調査ヲモ含ム	1933年-	資料ノート
4	6	昭和十七年 越後鱈場漁業調査 三月調	1942年	フィールドノート
4	7	瀬戸内家島真浦坊勢 伊豆安良 里、田子 戸田(鯉釣若者)	[1940年]	フィールドノート
4	8	民俗ノ問題 宿題 海の食物	[1942年-]	資料ノート・学務 ノート・フィールド ノート

箱No.	資料No.	表題	作成年代	分類
4	9	鯛網漁業		資料ノート
4	10	漁場 漁業組合規約	〔-1954年〕	資料ノート・フ ィールドノート
4	11	鯛網漁業		資料ノート
4	13	青梅	〔1969年〕	フィールドノート
4	14	福島県漁業制度改革記録*		資料ノート
4	22	近代化と民俗(学) 控え		資料ノート
4	23-1	北越月令 上		資料ノート
4	23-2	北越月令 下		資料ノート
4	23-3	後狩詞記		資料ノート
4	23-4	薩隅烟草録・その他煙草に関するノート		資料ノート
4	23-5	山村教育基礎調査・土佐高岡郡 梶原小学校 教員一同		資料ノート
4	23-6	漁村経済調査		資料ノート
4	24	明治生活史 [ ] 桜田	〔1952年〕	資料ノート
4	25	学生問題研究会ノート	〔1966年-1972年〕	学務ノート
4	26	昭和50年さくらだ 部科長会ノート	〔1975年〕	学務ノート
4	27	部科長会労務会メモ 桜田	〔1966年〕	学務ノート
4	28	社会経済史		資料ノート
4	29	社会演習 おぼえ 昭和47.11.20より	1972年-	学務ノート
4	30	土佐漁村 I		資料ノート
4	31	粉河記	〔1953年〕	フィールドノート
4	32	武蔵 民俗演習覚書-(1970-) 桜田記.	1970年	学務ノート
4	33	菜譜、労働図解、海の信仰		資料ノート
4	34	昭和44年3月 ノート 育児、婦人	1969年	学務ノート
4	35	家族構成		資料ノート
4	36	日本文化史 青梅長関の 壬申戸籍		資料ノート
4	37-1	日水社史へんさん抜粋	〔1961年-〕	資料ノート
4	37-2	◎第2回水博報告 魚網地 網撚糸ノ記事あり 漁撈論	〔1953年-〕	資料ノート
4	37-3	ノート 水産技術史資料覚一(1) 漁網篇一(1960年)	1960年	資料ノート
4	37-4	ノート2 水産技術史資料覚一(2) 漁網篇	〔1955年-〕	資料ノート
4	37-5	ノート3 魚網生産	〔1950年-〕	資料ノート
4	37-6	ノート4 函館財界50年史抄録	〔1960年-〕	資料ノート
4	37-7	ノート6 谷巖 日本綿漁網製造KK 文書ノ写 製網第1回	〔1960年〕	資料ノート・フ ィールドノート



箱No.	資料No.	表題	作成年代	分類
4	37-8	ノート8 第四回定置網懇話会より 大水広告 漁網商店名 ウインクレル 網太 東洋漁網書類 「漁網図鑑」 三十袋もじり*	〔1959年-〕	資料ノート
4	37-9	「帝水ノート2」 金沢(わが網網界の回顧) 油津とカゴシマ出漁組合 出漁村の事 移住漁業者の事	〔1962年-〕	資料ノート
4	37-10	漁網 ウタセー テグリー アグリー ひらたの回顧 明治31年綿糸網の腐朽について*	〔1961年-〕	資料ノート
4	37-11	手編ノ章	〔1963年〕	資料ノート
4	38	石川県漁網界の百年 漁網業界秘話 定置懇話会記事 ノート5	〔1954年-1957年〕	資料ノート
4	39	谷氏 石川氏談話 漁網技術史資料 ノート7	〔1960年〕	資料ノート
4	40	漁協干係ノート 漁港組合 出漁組合 送金一船宿*		資料ノート
4	41	ー	〔1939年-〕	資料ノート
4	42-1	日本捕鯨彙考 抜書写 〔上〕		資料ノート
4	42-2	日本捕鯨彙考 抜書写 中		資料ノート
4	42-3	日本捕鯨彙考 抜書写 下		資料ノート
4	43	海と漁		資料ノート
4	44	漁具記		資料ノート
4	46	明治廿九年 日本漁業誌 長崎懸編纂(漁網之部)		資料ノート
4	53-1	石地文書Ⅰ		資料ノート
4	53-2	石地文書Ⅱ		資料ノート
4	55	越後鰯場漁業古文書集Ⅰ 越後筒石村漁村経済調査ヲモ含ム		資料ノート
4	56	能生小泊 市振村 文書		資料ノート
4	57	屋敷、住宅、居住様式、家族制度、家連合ー同族・村		学務ノート
4	58	打瀬網 底曳網資料(東京内海 磯附漁村ノ事) ウナギ手堀(江戸川桑川町) テグリー網など 貝桁網など資料		資料ノート
4	59	水産キ録	〔1963年-〕	資料ノート
4	60	水産干係		資料ノート
4	61	漁村社会関係ノート		資料ノート
4	62	桜田 雑ノート		資料ノート
4	63	わが国水産雑誌の内容検討	〔1964年〕	資料ノート

箱No.	資料No.	表題	作成年代	分類
4	64	網漁業の沿革(主ニ底曳史料)		資料ノート
4	65	漁場紛争ノート		資料ノート
4	66	江川浦の「鰹釣組合」キ録ノート		資料ノート
4	67	漁場紛争ノート(1)		資料ノート
4	68	漁場紛争ノート		資料ノート
4	69	漁業紛争関係ノート(2)		資料ノート
4	70	帝水ノート -1		資料ノート
4	71	水産ノート		資料ノート・フィールドノート
5	1	1949-農村調査-	1949年	フィールドノート
5	2	漁 FISHING VILLAGE	[1948年]	フィールドノート
5	3	HINASE MUROTO	1947年	フィールドノート
5	4	1949, 9月調査 四国調査	1949年	フィールドノート
5	6	栃木山村調査講義用		学務ノート・資料ノート
5	7	道路之記		資料ノート
5	8	渋澤氏業績しらべ	[1963年-1964年]	資料ノート
5	9		[1970年-1971年]	フィールドノート
5	10	物資文化ノート		学務ノート
5	11			資料ノート
5	12	1950 4.4-4.23 栃木縣下都賀郡山村調査	1950年	フィールドノート
5	13	各科教授論 岡部氏		学務ノート
5	18	漁村社会史資料	[1949年-]	資料ノート
5	19			学務ノート・資料ノート
5	21	栃木、鹿沼 木工業(1) 1950.3.14	1950年	フィールドノート
5	22-1	栃木、下都賀 板荷村 1950.3.10-(I)	1950年	フィールドノート
5	22-2	栃木、下都賀 板荷村 1950.3.10-(II)	1950年	フィールドノート
5	23	漁業法		資料ノート
5	24	宇都宮2 25.7.12-13.	1950年	フィールドノート
5	26			資料ノート・学務ノート
5	27	宇都宮1. 25.7.12-13	1950年	フィールドノート
5	28	職事情		資料ノート
5	29	漁村戸口 静岡県(明治・大正ノ比較)		資料ノート
5	30	-		資料ノート
5	31	相州ノ漁村 新編相模國風土記稿ヨリノ抜書		資料ノート
5	41	府中間書	[1952年]	フィールドノート
6	6	十島巡遊 奄美大島	[1934年5月13日-]	フィールドノート
6	7	小豆島及び大阪はじめ	[1934年-]	フィールドノート・資料ノート
6	8	八束の海辺 昭和九年五月下旬	1934年	フィールドノート
6	9	昭和八年末 肥前の山(附 板屋)	1933年	フィールドノート
6	10-1	隠岐手帖 一	[1934年5月23日-5月25日]	フィールドノート
6	10-2	隠岐手帖 二 附大根島	[1934年5月23日-5月25日]	フィールドノート
6	11	昭和八年 日田紀行	1933年	フィールドノート
6	12	博多附近 近江の鰯 肥後田島	[1933年-1934年]	フィールドノート
6	13	筑紫五ヶ山 日向峠(及び志賀島)	[1933年]	フィールドノート
6	14	瀬戸内海記 一	[1933年]	フィールドノート

箱No.	資料No.	表題	作成年代	分類
6	15	志摩 和具調査控	〔1947年〕	フィールドノート (写)
6	16	南河内、天野村、泉州ニ入ル出稼人	〔1935年〕	フィールドノート
6	17-1	揖斐記 壱	〔1935年〕	フィールドノート
6	17-2	揖斐記 弐	〔1935年〕	フィールドノート
6	17-3	揖斐記 参	〔1935年〕	フィールドノート
6	18-1	大隈 百引記 一	〔1934年〕	フィールドノート
6	18-2	大隈 百引記 二	〔1934年〕	フィールドノート
6	18-3	大隈 百引記 三	〔1934年〕	フィールドノート
6	18-4	大隈 百引記 四	〔1934年〕	フィールドノート
6	18-5	大隈百引紀行Ⅱ	〔1934年〕	フィールドノート
6	19	長浜部落 文献観察Ⅰ		フィールドノート
6	20	大阪手記 貳	1934年	フィールドノート・資料ノート
6	21	奄美大島史		資料ノート
6	22	木賊生俳句集 上	〔1927, 8年-1951年〕	俳句・自伝ノート
6	23-1	川口氏鳥日記 全部		資料ノート
6	23-2	川口氏鳥日記 ぬきかき二		資料ノート
6	23-3	川口氏鳥日記 ぬきかき三		資料ノート
6	23-4	川口氏鳥日記 ぬきかき四		資料ノート
6	23-5	川口氏鳥日記 ぬきかき五		資料ノート
6	23-6	川口氏鳥日記 ぬきかき六		資料ノート
6	23-7	川口氏鳥日記 ぬきかき七		資料ノート
6	23-8	川口氏鳥日記 ぬきかき八		資料ノート
6	23-9	川口氏鳥日記 ぬきかき九		資料ノート
6	27	昭和15年 調 静岡県賀茂郡 仁科村	1940年	フィールドノート
6	28	房州鴨川調査 1947.10.8-17	1947年	フィールドノート
8	1	向津具の初春 一	〔1932年〕	フィールドノート
8	2	波の橋立 二	〔1932年〕	フィールドノート
8	3	六島の姿 三	〔1932年〕	フィールドノート
8	4	島の山村 四	〔1932年〕	フィールドノート
8	5	志賀島記	〔1932年〕	フィールドノート
8	6	筑前巡島記 相島、大島、地島の巻	〔1932年〕	フィールドノート
8	7	松浦の島々	〔1932年〕	フィールドノート
8	8	江島平島記	〔1932年〕	フィールドノート
8	9	八女紀行 一	〔1932年〕	フィールドノート
8	10-1	甌島紀行 一	〔1933年〕	フィールドノート
8	10-2	甌島紀行 二	〔1933年〕	フィールドノート
8	10-3	甌島紀行 三	〔1933年〕	フィールドノート
8	11	早良、糸島の春	〔1933年〕	フィールドノート
8	12	出水の海	〔1933年〕	フィールドノート
8	13	不知火海	〔1933年〕	フィールドノート
8	14	昭和九年二月 肥後めぐり 椎葉紀行	1934年	フィールドノート
8	15-1	思い出の記 一 東二番丁時代	〔1928年-1932年〕	自伝ノート
8	15-2	思い出の記 二 秋田時代 立町時代	〔1928年-1932年〕	自伝ノート
8	15-3	思い出の記 三 同心町時代	〔1928年-1932年〕	自伝ノート
8	15-4	思い出の記 四 同心町時代 二 鳴尾時代 一	〔1928年-1932年〕	自伝ノート
8	15-5	思い出の記 五 鳴尾時代	〔1928年-1932年〕	自伝ノート
8	15-6	思い出の記 (続き)	〔1928年-1932年〕	自伝ノート



写真5 「向津具の初春」(8-1) [大福帳]



写真6 「昭和八年 日田紀行」(6-11)

## 2) 形態別仮目録バインダー

バインダーという形態は、紐綴じ、リング式、ルーズリーフ、スクラップブックで、紙片を綴じる形態が該当する。ここでは、用紙に空いた穴を利用して綴じる形式に加え、ファイルケース状の中に収納するだけのものも含めている。バインダー形式は36件を数える。この数量は46となるが、枝番号の内容には封筒等の形態の資料が含まれている。内訳は、1箱17冊、2箱3冊、4箱2冊、5箱9冊、6箱8冊、7箱5冊、8箱2冊である。バインダーは1箱に集中している。枝番の多いバインダー（例えば、1-13）が含まれているためであるが、この内訳（2冊のバインダー、4つの封筒、1つの学術雑誌）を考慮しても、1箱のバインダーは12冊を数え、最も多い。編冊や作成年代を探る手がかりのために、バインダーの形態関連情報には、規格や形式、印字された製作会社の情報を載せた。

バインダーは、編冊の作成年代を特定できないものが少なくないが、戦前から戦後まで利用された形態の一つであると言える。形態別仮目録バインダー以外にも、形態別仮目録風呂敷内の「〔無題〕」(3-6-3、3-6-5)、「〔民俗学関係雑誌〕」(3-2-6)、形態別仮目録封筒内の「〔雑誌抜き刷り等〕」(5-33-2)、形態別仮目録雑内の「〔無題〕の書類ケース」(7-6)、「〔無題〕のSCRAP BOOK」(7-6)にもバインダー形態の資料が含まれている。



写真7 「長浜研究一般 壺」(1-9-1)



写真8 同左の目次

## 3) 形態別仮目録風呂敷

風呂敷は、雑多な形態の資料を一括りにしている。一括りにされている資料の形態は、封筒、ノー



ト、バインダー、カード、雑誌、抜き刷り、新聞等、様々である。風呂敷は9件を数える。内訳は、3-2 (22)、3-3 (1)、3-4 (5)、3-5 (16)、3-6 (9)、7-7 (21)、9-4 (5)、9-5 (6)、9-6 (33) である。括弧内の数値は、ひとくくりにされた資料（封筒、ノート、バインダー、カード、雑誌、抜き刷り、新聞等、様々な形態）を、資料撮影の便宜のため、並列的に数えたものである。多くは、同類の資料をまとめていることが多いため、そのまとまりを1つとして類別している。そのため、必ずしも、数値の1がそのまま1冊の学術雑誌というわけではない。便宜上の数値であることをお断りしておく。



写真9 風呂敷 (7-7) 外観



写真10 風呂敷 (9-6) 外観

風呂敷は3箱 (5つ) と9箱 (3つ) に集中している。枝番号の多いものに若干補足を加えよう。3-2は、主として1950年代以降にまとめられた資料類で、沢田四郎作や渋沢敬三等の追悼に関わる文書等、雑多な資料で構成されている。7-7は、漁業、山の神、漂泊、特殊等に関する資料カードを封筒毎に見出しをつけてまとめている。9-6の風呂敷は、木製の文書決済箱を包んでおり、その中に、宝島調査に関連するフィールドノートや資料が積み重ねられている。

#### 4) 形態別仮目録封筒

封筒という形態には、市販封筒、もしくは、郵送等に使用されたものを二次的に用いて、雑多な形態の資料をひとまとめにしたものを指している。ひとまとめにされている資料の形態は、資料カード、罫紙、原稿用紙、ノート、バインダー、書簡、抜き刷り、地図、新聞等、雑多である。封筒は38件を数える。内訳は、1-11 (1)、2-4 (10)、2-5 (25)、3-1 (1)、3-7 (1)、4-20 (1)、4-21 (1)、4-73 (1)、4-74 (1)、4-75 (1)、5-33 (2)、5-34 (1)、5-35 (1)、5-36 (1)、5-37 (1)、5-38 (1)、5-39 (1)、5-40 (1)、6-2 (1)、6-24 (1)、6-25 (2)、6-26 (1)、6-30 (1)、6-33 (2)、6-34 (1)、8-18 (1)、8-19 (17)、9-1 (1)、9-2 (1)、9-3 (1)、10-1 (42)、10-2 (1)、10-3 (1)、10-4 (1)、10-5 (1)、10-6 (1)、10-7 (1)、10-8 (1) であり、数量の総計は131である。形態別仮目録風呂敷と同様、封筒内には様々な形態の資料が納められているため、括弧内の数は便宜上の値となっている。

封筒は、5箱を中心に、前後の4箱と6箱に集中している。2箱、8箱、10箱には枝番号の多い封筒が収められている。このうち、2箱の2-4 (10) と2-5 (25) は資料カード、8箱の8-19 (17) は『海の宗教』(1970年) 出版に関わる諸資料、10-1 (1～42) は資料カードである。

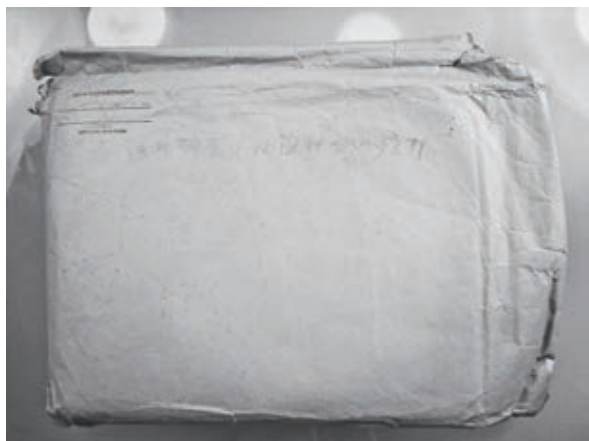


写真 11 「漁村調査（各漁村ニ於ケル）資料〔大芋〕」（8-18）



写真 12 「賀之部Ⅱ」（10-1-7）

### 5) 形態別仮目録雑

形態別仮目録雑は、上記以外の雑多な形態を扱っている。具体的には、紙箱、包装紙、木箱、抜き刷り、学術雑誌、印刷物、新聞、地図、書簡等である。枝番号を付したのは、木箱（7-9）のみであり、それ以外の数量は1点である。紙箱、包装紙、木箱に収納されている資料は、バインダー、封筒、資料カード、学務ノート、新聞等である。箱別の雑の収納状況は、2箱2件、4箱14件、6箱2件、7箱4件、10箱2件である。4箱に集中しており、内容は学術論文等の抜き刷り印刷物が主である。枝番号を付した木箱は、いわゆるカードボックスである。中には、資料カードが、見出しのついた仕切りによって整理され、多数収納されている。

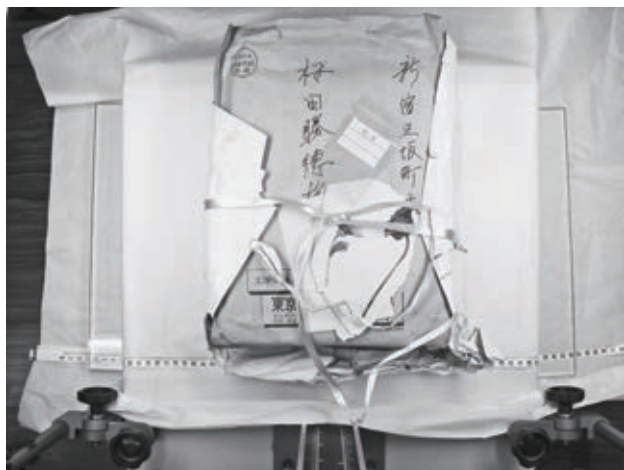


写真 13 「包装紙形態」（7-6）



写真 14 「カードボックス（木箱）」（7-9-1）

## 3. アーカイブの特徴

### 1) アーカイブの範囲と整序

このアーカイブの枠組みに関わる特徴として、まず、民俗学を研究し始める頃の資料が全般的に欠いている点を指摘できる。例えば、慶應義塾大学文学部史学科へ提出したとされる桜田の卒業論文「非農民考」は、このアーカイブで確認できない。また、桜田は俳句を嗜んでいたようであるが、このような文芸的関心を確認できる資料は、「木賊生俳句集 上」（6-22）以外、ほとんど含まれていない。青年期の思想的遍歴を辿れる資料も含まれていないようである。

アーカイブの整理状況は、基本的に桜田自身が施した資料の整理状態をなんらかの形で反映しているものと推察される。だが、慶應義塾大学へ寄贈されるまでの過程で加えられたと推察される改変には留意が必要である。小川博は、名著出版から『桜田勝徳著作集』を刊行した前後、桜田家から資料を借り出しては、返却を繰り返していた。本アーカイブには、例えば、形態別仮目録封筒「文献カード」(6-33-1～2)に、「桜田のペンネームと思はれるが、はっきりしない。小川」「桜田への追悼記」「百科事典の執筆項目」「原稿のままのこされたもの」等と題したメモが挟まれており、桜田没後に一定の再整理がなされている。この過程において、資料は相当程度、整序されたものと見る必要がある。

## 2) 背景

アーカイブの範囲に関わる重要な背景の一つは、度重なる資料の移転であったと言える。ここでは、年譜(『桜田勝徳著作集』7)と、桜田武徳氏(桜田勝徳の長男)に対するインタビューに依拠して、アーカイブと移転との関わりについて素描する。

桜田は、その人生の大半を転居の繰り返しで過ごしてきた。父(寿)の職業(裁判所判事)との関係もあり、1903年に宮城県仙台市北目町に生を享けて以来、仙台市東二番丁(1906年)、秋田県秋田市東根古屋町(1910年)、宮城県仙台市立町(1912年)、同市同心町(同年)、兵庫県武庫郡鳴尾村(現西宮市)(1913年)、東京都湯島・西大久保・森川町での居候・下宿時代(1924年)、福岡(1931年)等、居所を転々とした(住所名は当時のものである)。結婚(1933年)後も、大阪(1934年)から東京へ移り、大森区梅田町(1935年)、大森区堤方町(1935年)、世田谷区松原(1941年)等と変転した。戦中戦後においても、長男の学童疎開(新潟県古志郡栖吉村)、家族の縁故疎開(北埼玉郡大桑村南篠崎、1945年)も経験し、戦後は、港区三田の渋沢敬三邸へ居候した(1948年)。居所が定まったのは、新宿区坂町に土地を得て新居を建ててからであった(1951年～)。

アーカイブの内容と転居との関係に留意してみると、例えば、桜田は、1932年当時、福岡県鐘崎など海士の漁村を中心に採訪を行い、「記文」を『俚俗と民譚』『福岡』という雑誌に掲載していたが、「この雑誌も当時のノートも戦時中の疎開などのためになくしてしまい、当時を偲ぶよすがを失ってしまっている」という[桜田 1964: 54]。「疎開などのため」とは、北埼玉郡への縁故疎開によるものと考えられる。さらに、桜田勝徳が痔の療養中に記した日記の中には、「世田谷の小生書斎に焼夷弾三個落下の由、治子かたる」と記されている。1945年6月7日の記録である[川上(桜田) 1983-1984(2): 7-8]。これによれば、妻の治子が、桜田の世田谷にある書斎に焼夷弾が三個落下した情報を伝えたことが分かる。桜田武徳氏によると、この時期に世田谷への空襲は確認できないので、桜田勝徳の思い違いや誤情報ではないかという。アーカイブ中にも類似の記録を確認できる。「志摩 和具調査控」(6-15)の表紙には、「昭和12年調査書類ノ約半分ガ散佚シタ。之ヲ要約シノートシ置ク 昭和二十二年寫」と記されている。武徳氏によると、疎開先からアチックミュージアムへ間借りを一時した際、桜田の資料や書籍は、部屋の真ん中に荷造りしたままの状態で置かれており、それを紐解いた記憶がないという。何時、どこで散逸したかは不明だが、資料散逸に対応し、他のメモや記憶に基づき、「要約」したノートを改めて作成したものだろう。桜田の資料はこのように幾度となく「散佚」に晒されたと見るべきであろう。



### 3) 特徴

以上の制約がありながらも、桜田勝徳の調査研究資料は慶應義塾大学に現在、保管されている。この調査研究資料の特徴を端的に延べると、主として、手書き、印字等によって作成された民俗学的調査研究文字資料であると言える。この特徴は、以下の3種の資料が基本的に欠けている点から導かれる。

1つ目は、桜田が所有していた研究図書、雑誌等の書籍が基本的に含まれていないことである。桜田武徳氏によれば、これらの書籍は、桜田が良く利用していた古書店へ、没後に売却したという。もっとも、学術雑誌のいくつかは、アーカイブの中に数冊含まれており、抜き刷りの類も少なからず認めることができる。

2つ目は、民具等の物質文化資料が収納されていないことである。実物の綿（形態別仮目録封筒、10-4の封筒内）、寸法を記した木片（形態別仮目録風呂敷9-5-3）が認められる程度であり、非常に少ない。

3つ目は、民俗資料に関わる写真等の画像資料が基本的に欠如している点である。わずかに認められる写真については、自画像（形態別仮目録雑、4-50）であったり、家族員（形態別仮目録、6-4）であったり、私的なものと言える。桜田は、1930年代からカメラを利用していた。例えば、山村調査地の記録「大隈 百引記 四」（6-18-4）には、調査中に写真機が壊れ、修理の相談をする等の記録がなされているし、1950年代のフィールドワーク中の桜田はカメラを首から吊している（写真15）。桜田は、カメラをフィールドワークに必須のものとしていたようである。武徳氏のインタビューによれば、桜田勝徳は戦前からカメラを使用していたという<sup>4)</sup>。アーカイブ中に写真が少ない点は、これらの点から考えると釈然としない点が残る。

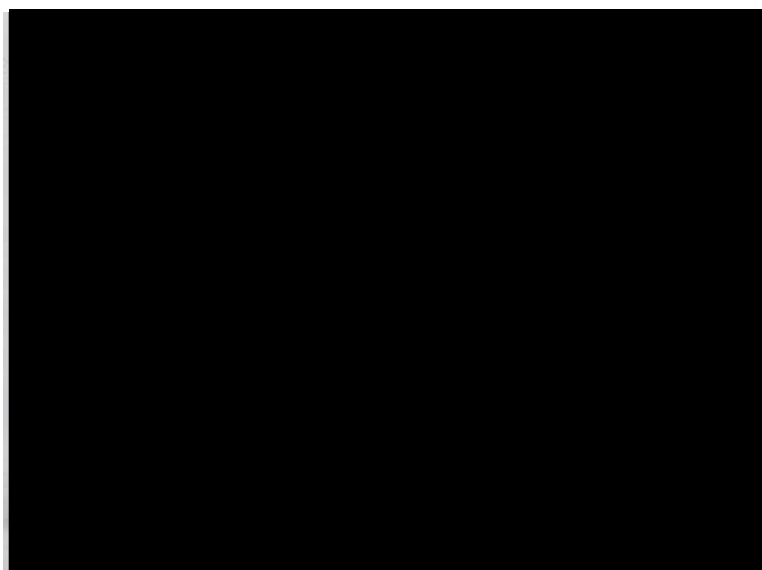


写真 15 「1954 年、末忽戸デ」：桜田武徳氏所蔵。参考「千葉県千倉でのフィールドノート」（4-20）。桜田はカメラを首から吊し、手にしている。

桜田が、研究者として就職（大学）したのは、働き盛りの年齢層を過ぎた 64 歳の年であった（1966 年）。研究に必要な蔵書・資料を収蔵する空間を自宅以外に確保することは、それまで、基本的に叶わなかった民間の民俗学者であったと言える。そうした立場でありながら、桜田は、1935 年からアチック・ミュージアムの研究員として三田の渋沢敬三郎へしつらえられたアチックミュージアムへ出入りすることができた。また、戦後、1950 年からの約 15 年間（1955 年まで）は日本常民文化研究所の理事長を、その後、水産庁水産資料館長（1955 年-1965 年）をつとめた。桜田は、それらの機関に収蔵された資料を利用する環境にあったとも言える。桜田自身の調査研究資料の偏りについては、これらの研究機関や資料館を利用できる資料環境と関連させて理解すべきであろう。

## 4. アーカイブの可能性

桜田勝徳調査研究資料の形態、内容は多岐にわたり、アーカイブの収納整理形式は数次にわたる階層構造を有している。今次の目録化作業は、その階層的構造の大枠に焦点をあて、整理したに留まり、階層の隅々にまで細かな配慮を施すことはできていない。今後の調査研究が待たれる所である。ここでは、現段階で把握できたアーカイブの特徴から、閲覧や、今後の調査研究の便宜に供する簡単な見取り図を示しておく。

### 1) 空白の学史究明

本アーカイブには、学史において未だ未解明である空白時期に関わる資料が多数含まれている。例えば、GHQ 下で行われた社会調査に関する資料を挙げることができる。この社会調査の資料は、フィールドノート、バインダー、封筒といった諸形態でこのアーカイブに含まれている。バインダーと封筒を見てみよう。バインダーとしては、「滋賀縣蒲生郡苗村調査控（一九四九、十一、十四―十九）（5-5）、封筒としては、「[「雑保もの」「雑保 モチカエリ」]」（3-2-17）、「漁村調査（各漁村ニ於ケル）資料 [大芋]」（8-18）、「[CIE 漁村調査関係、カード、下書き、英訳等]」（9-1）等がある。3-2-17 や 8-18 の封筒は、WAR DEPARTMENT official business と印字されたものであり、9-1 の封筒はアメリカのオハイオ州立大学のものである<sup>5)</sup>。

これらのバインダーや封筒には、GHQ の CIE で民俗学者らが携わった漁村調査（9-1）、家族調査（5-5、8-18）、森林社会学調査（3-2-17）に関わる資料が収められてある。漁村調査資料には、CIE が行う調査フィールドを記載した地図、重要語彙の日本語と英訳カード、漁業に関わる論文の翻訳資料、桜田勝徳による NRS（天然資源局）への提言文章等が、家族調査資料には、調査報告の原稿や下書きが、森林社会学調査資料には、地理学者小寺簾吉のフィールドノートが少なからず含まれている。ノートについては、論考編で取り上げるが、農村調査、漁村調査、家族調査、森林社会学調査いずれのフィールドノートも所蔵されており、これら社会調査の実態を明らかにする上で、重要な資料であると言える。

次に、農林省や水産資料館時代の資料を挙げることができる。桜田は、官庁（農林省・水産庁）に勤務した経歴を有する。農林省当時の職務に関わる直接的資料については、精査が必要であるが、「昭和十七年 越後鰯場漁業調査 三月調」（1942 年 3 月）（4-6）等は、農林省時代のフィールドノートと考えられるし、実際に、農林省の統計データは各所で活用されている（例えば、「水産」5-14 等）。また、バインダーの「船の資料」（1-13-2）、「庫中日録一」（4-12）、風呂敷（3-2-16）、風呂敷（9-5）などは、水産資料館時代の資料と考えられる。中央水産業会に関する資料も同様であろう。本アーカイブには、中央水産業会の野紙等も多数含まれている。今後のより詳しい検討が待たれる。

この外、学務関係資料は、「民間伝承総論」（4-3）ほか、多数がノートの形態で収蔵されている。ノート以外にも、「TOKYO BUNGU NORENKAI 高村紙文具店」（「成城 民俗学講義」9-3）、「Forum シェル興産株式会社」（「文化史 日本文化史ノート」3-2-2）などの封筒に、講義ノートが含まれている。民間の研究者であった桜田が、高度経済成長期における大学で、いったい、何をどのように民俗学として教育していたのかも、重要な学史の一つと言えよう。

### 2) 編冊・著述・出版の過程

桜田の民俗学研究は、多くの民俗学者と同様、フィールドワークの実施により作成したフィールドノートを基に、資料を整除化し、文章化していくパターンに依拠していたと推察される。上記し



たGHQの社会調査に限らず、本アーカイブには数多いフィールドノートが収蔵されている。バインダー形式の編冊の意図は幅広いものであったと考えられるが、これらフィールドノートの資料を整理する過程で行われたものは、その主要な編冊の1つであったであろう。

バインダーについて、桜田は、基本的にテーマ毎に資料の編冊を行っている。例えば、「長浜研究一般 壺」(1-9-1)は、アチックミュージアムによる調査に基づく資料であるが、その目次は以下のようにになっている。

1. 長浜人別帳ノ観察
2. 長浜聚落地図類
3. 正保二年同三年同五年家別土地所有状態
4. 正保二年家別人別表
5. 正保ヨリ（延宝年間迄戸主調
6. 正保二年家別人別書ヨリ持高別家数家高調
7. 正保三年水帳ヨリ
8. 天文十二年家別土地所有調
9. 文禄十三年水帳ヨリ
10. 長浜村勢変遷一覧
11. 村差出帳類ノ控
12. 水産博覧会報告重要ノ漁業
13. 村差出帳類ノ控

このバインダーは、土地所有等に焦点をあわせ、社会経済史的な観点から長浜の村落構造とその変化を捉えようとする資料集になっている。

桜田は、そして、時々、このような編冊をほどこし、新たな編冊を施していたようである。この点は、表紙のみのバインダーの断片が存在する点に認められる（例えば、形態別仮目録バインダー、1-13-6）。断片となったバインダーの表題は、「木賊文集 水産雑」、「自執筆諸抜刷集」（形態別仮目録風呂敷 3-3）、「水産 係ヲ除ク 木賊文集」「木賊文集 漁村関係（印）」等とある（形態別仮目録バインダー、5-32）。「木賊書屋」の所蔵印が押印された表紙がある点からは、桜田が、研究に関わる資料を類別し、編冊すると同時に、それを集積した「木賊書屋」というアーカイブとして効率的な活用の道を志向していたことが窺われる（蔵書印は、その他、形態別仮目録ノート、4-6、4-35等にもあり）。

「アチックミウゼア□旅行 漁村採□手記」(8-16)を例に「手記」というバインダーの編冊内容を見てみよう。「アチックミウゼア□旅行 漁村採□手記」のバインダーは、主としてアチックミュージアムで調査した漁村のフィールドノート資料を整理した手記である。「採□手記」とは「採訪手記」と記されたものであろう。内容は、表2の目次から窺える。年代は、調査時期を示し、1936年～1940年の5年間ほどの調査記録を整理した文章となっている。目次の内容と中表紙の内容とが必ずしも一致しておらず、草稿段階の文章を編冊したものであることが分かる。

表2 「アチックミウゼア□旅行 漁村採□手記」(8-16)の目次

目次	細目	中表紙表題	細目
○広島県地御前漁民間書 (昭和十一年八月)		昭和十一年八月十三日 広島県地御前漁民より聞書	
○岩手、上閉伊、大槌湾 紀行(昭和十四年秋)	吉里吉里 部落、漁業概記 安渡 部落、漁業概記 白浜 部落、漁業概記 室浜 大家と名子、奉公人 白浜は昔海上に出るといふ 再び白浜の事 室浜の興板船 吉里吉里の鰹漁の餌取漁 白浜の鰹船分配慣習 安渡の旧漁業 鰹漁、目抜延縄分配 大槌勤着 大槌目抜縄漁 鰻網 越中漁師 鮮魚輸送 星名 風名 大槌アカブ旅館のミホギ建築 メノコをカテにする方法(白湾) 一月十五日の舸子ゾロエ テツカといふ漁具 漁衣 若者の仕事 船玉にする木 漁忌 船玉神体 魚体部分名	岩手県上閉伊郡漁村日記	
○会津只見川上流、伊方 村田子倉談 昭和十二年 皆川幸寿君談	トリモチ製造の話 鳥打ち、鱈漁 山サキ即ち山の太夫と入会慣行 田子倉の苗字	昭和十一年十一月二十八 日二十九日 越後村上、 布部 記	
越後村上布部根手記、昭 和十一年	村上鮭川漁 漁語彙 村上の川舟 テイシとワタリの事 布部 縄なひの事 漁具、川漁 オサド様の事、魚の尾		

目次	細目	中表紙表題	細目
○越後漁村巡遊 十三年	昭和 阿賀川口松崎湾 鮭地曳網その他 福島潟 芦刈り 北蒲原、藤塚湾 部落、漁業 漁法、舟玉 漁衣、海の怪 山ダテ 風星汐名 三島郡野積 部落、地曳網 同寺泊町 三漁師の事 北魚沼郡川口町 川漁各種 川舟、漁習俗	昭和十三年十一月 越後 漁村巡遊見聞	阿賀川口 松ヶ崎漁業 1. 鮭地曳網漁 2. 鱈地曳網漁 3. 蝦網漁 4. その他の漁 5. 雑記 6. スビキ漁 福島潟畔 1. 蘆刈り 2. 潟で見た漁業 3. 菱採り 4. 水禽猟 5. その他 北蒲原、藤塚浜 1. 部落 2. 漁業一般（配縄、鯛釣、漬柴漁） 3. 地曳網漁 4. 漁祝（ゴグイ酒、春手繰の乗組） 5. 舟玉 6. 禁忌習俗 7. 海の怪 8. 海底地形名 9. 山ダテ 10. 潮名 11. 風名 12. 星名 13. その他の語彙 三島野積 1. 部落状況 2. 漁業一般 3. 地曳網漁 4. 漁業振興（出初め、エベス様の年取り、エベス様は片目、忌語 5. 物の名称 三島郡寺泊町 1. 漁業 磯見、沖漁師、鱈場漁師、磯見漁師の漁業（章魚捕り、潜水漁、カケナワ漁）、漁衣と道具箱 2. 三面神社 3. 風待湊 4. オコジに螫された時 5. 貰い子 北魚沼郡川口村 1. 漁業 鮎釣り、アキカハ漁、カキカハ漁、イグリアミ漁、ウチキリ、イシソコブチ、ザイワリ、川漁の時間、特殊部落民の漁、川口村の漁業者数 2. 漁舟 3. 漁業習俗 奥槌をかける、鮭漁と産火、エビス講、鮎取りに出ぬ日、舟祭、十二講、初漁祝、アング別れ 4. 語彙
○志摩国崎(昭和十五年)	年齢階級 神役と神事 漁業 漁家	志摩、国崎 [松井晴記氏 談ガ主デアル]	

目次	細目	中表紙表題	細目
○桑名 赤須賀（同上） 桑名市外 貝弁川畔 友村 岩谷久米太郎談 （四五才）		三重県桑名市赤須賀にて	1. 蝦曳網（手繰網）、船一艘二網一帖漁夫二 2. 白魚裳網 3. 鰯罟刺網 4. 揚繰網 5. 貝巻（蛤貝巻、シシビ介巻、蜆介巻、馬鹿介巻） 6. 建干網 7. 鰻釜 8. ツボ籠 9. 浮曳（ウケビキとルビ。ゴソとも云ふ） 10. 投網 11. 釣漁 12. 打瀬網 13. 長縄（延縄） 14. 蟹掛 15. 蛸瓶 16. 雑魚地曳網 17. 簀曳 18. 牡蛎 堤防下ノ牡蛎自然採取、爪五本の熊手様のもの（柄二間）でとる 19. 海苔養殖
○岡山県牛窓の鰯漁		（表紙・表題なし）	
○瀬戸内海家島聞書		（表紙・表題なし）	
○伊勢度会郡漁村記		伊勢度会漁村記	

「木賊文集 水産雑」(形態別仮目録風呂敷 3-3) を例に、「文集」の内容を探ってみよう。「木賊文集 水産雑」には表3のように目次がまとめられている。

以下の項目を桜田の著作と対照させてみると、1つを除いてすべて公刊された文章であることが分かる。刊行時期は1936年～1950年の15年間であるが、1945年以降にまとめられたものが6つあり、既存にとりまとめた文章とともに、特に戦後から1950年代あたりにとりまとめた文章を編冊したものと推定される。「文集」という編冊に対する桜田の考え方は、フィールドワークや文献調査に基づく整理された資料をもとに一定のテーマで考察をした文章を集めて綴じたものと言える。「文集」という編冊の表題は、著作物作成の一段階で編冊された過程的産物としての性格を有しているのではないかと考えられる。

表3 「木賊文集 水産雑」の目次（3-3）

目次内容	著作集への収録	初出雑誌名等
1. 漁獲物の分配と年令階級制度	未収録	1943「水産界」(原題は「漁獲物の分配と年令階層制度」)
2. 同族小漁村とその漁業	未収録	1943「水産界」
3. 網子	3巻	1947「短歌往来」
4. 漁村の家について	1巻	1947「民族学研究」
5. 鰯場の村	未収録	1948「社会圏」
6. 漁と迷信	2巻	1948「漁村」
7. カツヲ漁業の今昔	未収録	1948「水産」
8. 困窮島	2巻	1936「大坂民俗談話会記録」
9. ニツの漁村		
10. 漁民と神幸	未収録	1950「民間伝承」

このように、ノート、バインダーに認められる表題は、桜田がどのように資料を類別し、編冊し

ていこうとしたのかを探る手がかりとなっている。ここで検討した以外にも、「ノート」「日録」「文集」「手記」「思い出の記」等の表題が散見される。アーカイブには、未刊行の原稿も少なくないと思われる。今後の研究が待たれる所以である。

### 3) 情報カードの利用

1903年に生まれ、1977年に没した桜田勝徳は、生涯にわたって、著述活動を手書きで行っていた。そのため、本アーカイブを多く占めるのは、手書きによる資料となっている。手書きによる資料は、僅かなメモ、カード、文書の抜き書き、文書の筆写、整理資料の記述、草稿、原稿など幅が広い。中には、九州帝国大学へ出入りしていた当時の用紙である「Kyushu Imperial University Faculty of Law & Letters」のメモ用紙も見られる。例えば、「徳山村山村調査のフィールド整理ノート」(形態別仮目録バインダー、1-12-1～2)「漁村語彙 船ノ部」(形態別仮目録風呂敷、3-5-14)。特に目立つのは、情報カードで、本アーカイブの大きな特徴の1つとなっている。情報カードは、縦8センチ弱×横13センチ弱の紙片を用いて、民俗語彙、その内容、出典等を記したものである。

情報カードは、風呂敷(7-7)、祭魚洞書屋収蔵古文書(「正月」2-4-1)、九州帝国大学農学部(「九州に於ける正月行事」2-4-1)等に収められており、特に、形態別仮目録雑の木箱(7-9)には、仕切と見出しによって整理された形で収納されている。また、「文献カード」(形態別仮目録封筒6-33-1～2)に、著作の図書カードが多数収納されている。必要に応じて、木箱の情報カードを検索し、研究資料として活用していたものと思われる。情報カードが不足すると、同様の大きさの紙片で代用され、葉書を裏紙として用いることも少なくなかった(形態別仮目録風呂敷、9-5-1、9-5-6等)。自らのノートもそうした情報源として活用していた痕が窺える。例えば、『海の宗教』(1970年)の著述資料が収録されている「淡交社 海の信仰」(8-19-9)の封筒には、「「甌島紀行」一」を典拠に「餅石」等、石の資料メモが入っている。「「甌島紀行」一」とは、形態別仮目録ノートの「甌島紀行 一」(8-10-1)を指している。自らのフィールドノートも、表題を付すことで参照対象として効率的に利用できたことが分かる。資料メモの多くは、情報カードを模した大きさの紙片であり、情報カードの利用法を窺わせている。桜田は、カードを収納する木箱に資料カードが見当たらないと、他の情報源を参照して情報カードを繰り返し作成し、調査のメモとしたり、著述の資料としたりしていたものであろう。資料を編冊する過程で、このような情報カードの利用方法がなされていた点は、本アーカイブを読み解く上で留意すべきポイントの1つとなっていると言えよう。資料だけを見ていると、桜田は暇さえ有れば、情報カードの作成に勤しんでいたかのようである。こうしたカードの利用方法は、恐らく、柳田国男に学んだのであろう。これら情報カードを、柳田以降の民俗学者が、いかに活用していたかについては、学史の範疇に入る重要な課題となろう。

桜田勝徳は、柳田国男の影響を受けつつ、アチック・ミュージアムの薫陶を受けた以降は、柳田から離れていった民俗学者として知られる。本アーカイブを覗くと、桜田の研究人生は通り一遍のものでなく、激動の時代に即したものであったことが窺える。農林省や水産庁といった官庁勤務のほか、敗戦直前まで、中央水産業会へつとめ、敗戦直後にGHQにつとめた民俗学者の実態は、いまなお明かではない。本アーカイブは、そのような実態を明らかにし、昭和の語られなかった民俗学史の重要な側面を明らかにする可能性を秘めている。のみならず、このアーカイブは、40年以上にわたって記録保管されてきた近代から現代を駆け抜けた一知識人の軌跡をあとづけることを可能にしている。これらの可能性は、アーカイブの利用如何に託されていると言えるだろう。諸氏による積極的な活用を望みたい。



## 【引用参考文献】

- 小川 博 「桜田勝徳」、瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス』ペリカン社、1979年
- 小川 博 「桜田勝徳年譜」『日本観光文化研究所研究紀要』、5、近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所、1985年
- 川上 武 「桜田勝徳『痔治療日記（1-4）』－病人史の資料として－」『科学医学資料研究』（113-116）、1983-1984年
- 川崎 史人 「桜田勝徳資料」『史学』53（2・3）、慶應義塾大学文学部史学科、1983年
- 川崎 史人 「桜田勝徳先生資料紹介」『史学』54（1）、慶應義塾大学文学部史学科、1984年
- 桜田 勝徳 「洪沢先生の思い出」『近畿民俗』（35）、1964年
- 桜田 勝徳 『桜田勝徳著作集（全7巻）』名著出版、1980-1982年
- 中野 泰 「日本占領期における日本民俗学者とアメリカ社会人類学者の邂逅－民間情報教育局（CIE）による National Fishing Village Survey と attitude survey から－」『歴史人類』、40、2012年
- 中野 泰 「「漁業権改革」における「日本漁村調査」と民俗学者の実践－天然資源局文書：Chronological Record of Actions Concerning Fisheries Rights を中心に－」『日本列島周辺における水産史に関する総合的研究（国際常民文化研究叢書：2）』、2013a年
- 中野 泰 「幻の Forestry Sociology－GHQ 下の構想と民俗学者の参与－」『歴史人類』、41、2013b年
- 野地 恒有 「資料 桜田勝徳研究史年表」『人類文化』7、1987年
- 福田アジオ 「桜田勝徳の民俗学と全体性の把握」『日本民俗学方法序説』弘文堂、1984年
- 福田アジオ 「桜田勝徳の現代性」『日本民俗学』164、1986年

---

## 注

- 1) ダンボール箱には、2種のメモ書きがなされてあった。1つ目は、「箱4 残り 調査ノート類」「大福帳ほかノート 6番」などと直接マジックで内容のメモ書きをしたものである。桜田勝徳の筆跡ではなく、小川博のそれと思われる。2つ目は、タックシールを用いた内容のメモ書きである。例えば、「桜田勝徳先生」「沖縄（GHQ時代）漁村関係（川崎史人氏がゆずりうけた資料）」等と記されてある。慶応大学文学部民族学考古学研究室で記したものであろう。なお、アーカイブには、小川博のメモ書きも少なからず残されている。民俗学者小川博は、桜田没後から慶応大学へ寄贈される以前に、治子氏を介して、このアーカイブから資料をたびたび借用していたようである。
- 2) この研究の過程で、以下の論考をまとめた〔中野 2012、2013ab〕。
- 3) 調査は、武徳氏の自宅で、2015年5月29日、7月10日、12月7日に、中野泰と渡瀬綾乃が行った。武徳氏（1935年生まれ）は御高齢にも関わらず、関連資料の閲覧とともに、細かな質問にまで丁寧に答えて下さった。武徳氏と奥様へ、この場を借りて厚く御礼申し上げる。
- 4) 戦前に使用していたカメラは、ドイツ製の二眼レフカメラ、イコフレックス（Ikoflex）であった。このカメラは、桜田の父寿が満州に出張した際のもので、桜田とともに長男武徳氏が1955年夏まで使用した。その後に使用していたカメラはオリンパス・ペンS、オリンパス 35ED であったという。
- 5) オハイオ州立大学は、CIE の社会調査をけん引したベネット（Bennett, John W.）が CIE 閉室後に赴任した大学である。